

## ねぎの今後の病害虫対策について

今年も秋冬ねぎの出荷シーズンになりました。近年は、連作等による病害虫被害の増加に加え、問題となっている難防除害虫の被害地域が拡大しており、ねぎの大幅な生育遅延や収量低下が見られます。被害を防ぐため、今号では秋冬期に発生する2つの病害虫とその対策方法をご紹介します。

### 1 ネギネクロバネキノコバエ

白い体色に黒い頭部を持つ幼虫が、地中でねぎの茎盤部や軟白部を食害します。排水不良地を好み、集団で加害するため、激発するとほ場が坪枯れとなります。3月中旬～12月上旬まで長く活動し、特に9月～11月にかけて急増します。ねぎ栽培後も、雑草や収穫残さに寄生して生き残ります。



集団で加害するネギネクロバネキノコバエの幼虫

### 2 黒腐菌核病

地下部は黒く腐敗し、ゴマ粒大の黒色の菌核が形成されます。地上部は生育不良や外葉の黄化が起こり、葉鞘部に白いかびが生じる病気です。病原菌は低温を好み、発育適温は15～20℃、激しく蔓延するのは10℃前後です。

排水不良やpHが低いほ場で発生リスクが高くなり、一度発生すると菌核が土壌中に残るため、長年の伝染源になります。確実な防除効果を得るには、耕種的防除や土壌消毒、薬剤防除を組み合わせた総合的な防除対策が必要です。



黒腐菌核病発病株

### 3 防除対策について

#### (1) 薬剤防除

① ネギネクロバネキノコバエ  
3週間間隔で殺虫剤をローテーションで散布しましょう。11月末までの防除が被害低減に重要です。

薬剤の中でも、粒剤や株元灌注剤が土中のネギネ幼虫に効果的です。まだ土寄せ量が少ないほ場では、土寄せ前に株元灌注剤を使い、茎盤部(根元)まで

しっかりと薬液を届けるように処理しましょう。

#### ② 黒腐菌核病

地下部の被害を防ぐために、茎盤部(根元)までしっかりと薬液を届けることが重要です。農薬の使用基準に示された薬液量を、土寄せ前に処理しましょう。

薬剤処理間隔は、1～1か月半程度が望ましく、年明け以降(2月)以降では2月まで薬剤防除が必要です。

#### (2) 薬剤以外の防除

上記の病害虫は、どちらも排水不良地や連作等で被害が拡大します。左

記の対策方法を実施し、地域全体で被害を減らしていきましょう。

① 明きよ等の確認・整備で排水対策を徹底し、滞水による根傷みを防ぐ。

② 病害虫を広げないよう、発生ほ場で収穫機やト

ラクタ等を使用した後は、付着した土をしっかりと落とし、他のほ場に持ち込まない。

③ 被害残さ・収穫残さをほ場外に持ち出し、残さをビニールで覆うなど適正に処理し、次作の発生源を無くす。

④ 休耕畑で土壌消毒や緑肥の作付けとすき込みを行い、病害虫密度を下げる。

⑤ ほ場周辺の除草を行い、ネギネクロバネキノコバエの寄生場所を無くす。

● 防除方法や薬剤に関するご質問などがございましたら、当センターまでご連絡ください。

表 ねぎ生育期の農薬例 (令和4年10月1日現在)

作用機分類 (IRAC/FRACコード)	薬剤名	使用方法	本剤の使用回数	ネギネクロバネ類	黒腐菌核病
I: 3A	フォース粒剤※1	株元散布	1回	○	
I: 15	カスケード乳剤	散布	3回以内	○	
I: 4A	スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤	株元灌注	1回	○	
	スタークル粒剤 アルバリン粒剤	株元散布	2回以内	○	
I: 28	ヨーバルフロアブル	散布	3回以内	○	
I: 30	グレーシア乳剤	散布	2回以内	○	
F: 7	パレード20フロアブル	散布	3回以内※2		○
	アフエットフロアブル	株元灌注	2回以内		○
	カナメフロアブル	株元散布	4回以内		○
F: 11	メジャーフロアブル	散布	3回以内		○
F: 12	セイビアフロアブル20	散布	3回以内		○

※1 使用時期は収穫30日前まで

※2 育苗期後半～定植当日に灌注で使用した場合は残り2回

● 農薬を使用する際は、必ず使用農薬のラベルを確認し、農薬の成分ごとの総使用回数を超えないようにしてください。  
● 同じ作用機分類 (IRAC/FRACコード) の薬剤は連用せず、系統の異なる薬剤とローテーションして、害虫の薬剤抵抗性や耐性菌を増やさないようにしましょう。